

北海道大学

「世界の課題解決に貢献する北海道大学へ」というビジョンの実現・達成に向けての「HOKKAIDOユニバーサルキャンパスイニシアチブ (HUCI)」構想と「144改革プラン」、世界で活躍するグローバルリーダー育成に向けての取り組みについて、お話を伺いました。



山口淳二 先生



川野辺創 先生



青木麻衣子 先生



喜多村昇 先生

北海道大学が想定するグローバル人材像について聞かせてください。

■山口先生

グローバル人材を一言で申し上げると、人間力と高い専門能力に裏付けられた行動力・コミュニケーション能力、そして創造力を備えた人材ということになります。グローバルや国際と聞くと、どうしても留学をして、英語が堪能で…というイメージを持たれがちですが、それでは英語が上手になることが本当に国際的に活躍できることなのかというところが問題になってきます。北海道大学では、単純にその2つではないということを学生たちに気づかせ、自ら努力させるというところに力を入れています。そもそも北海道大学には、国際教養学部はありません。12の学部があり、その中の学科を考えればもっと専門性が高い。まずはそれぞれの専門をしっかり学んで欲しい。それぞれの分野の専門をいかしたプロフェッショナル、国際的に活躍できるプロフェッショナルを育成することが最初の目的となります。

グローバル人材育成に向けての具体的な取り組みについて聞かせてください。

■山口先生

代表的なものとして「新渡戸カレッジ」というプログラムがあります。各学部での教育にプラスして、まさにグローバル社会で活躍するために必要なスキルとマインドを学ぶことを目的としたもので、12学部の全ての学生を対象とした横断的教育プログラムです。その中の代表的な制度・プログラムについていくつかご紹介します。

○海外留学：協定校等への留学、短期留学スペシャルプログラム、各学部の派遣プログラム等。

単純な語学留学や異文化体験だけではなく、専門性を担保し、海外の同じ分野の学生と濃いディスカッションができることを目標としています。

○フェロー制度：同窓生によるキャリア形成支援。同窓生等の中から国際的に活躍されている方（フェロー）を選び、グループ・ミーティングやフェローゼミ、対話プログラム等のプログラムを担当して頂くことで、フェローの社会での経験や知見に直に触れることで学生自身のキャリア形

成に役だてます。

- フェローゼミ：フェローの主導により現地視察の中から課題を発見し、グループワークにより課題解決方法を探る演習。チームで課題を設定し、解決策をプレゼンし評価します。訪問先としては、魚市場・牧場・自動車工場・商店街・介護施設等があります。
- グローバル基礎科目：リーダーシップ力に関する気づき、海外留学の意義、学問の世界、現代社会の課題、キャリアデザインの視点から学び、個人とチームとしての考えを深めます。

新渡戸カレッジは、英語能力試験の合格者をまずは仮入校という形で半年（4月～10月）のお試し期間を設けて実際に体験してもらい、国際的に活躍したいという強い志・希望を継続して持っている学生に対して、引き続き機会を提供するような形になっています。

高い志のもとで「気づき」をしっかりと身につけていく、後は自分で気づいたことについて、カレッジ生同士とフェローをはじめとする関係者との「きずな」をいかして日々学んでいく。そうすることで、4年、10年、20年…と経った時に、人として大きな差が出てくる。そういったところもねらいとしています。

北海道大学におけるスーパーグローバル大学創成支援事業（SGU）への取り組みについて聞かせてください。

■川野辺先生

SGUの構想、特徴を一言で申し上げると、全学的・学部横断的な取り組みということになります。一部の大学では1つの学部を作ってそこで集中的にグローバル人材を育成していますが、北海道大学では新渡戸カレッジに代表されるように、文系理系医系に関わらず、全学的に取り組んでいます。大学力強化推進本部を立ち上げて、様々な教育プログラムと研究強化の組織を一体化させ、色々な方々・仕組みとの連携強化、充実を図っています。

SGU、特にタイプAについては、世界のトップ100（世界大学ランキングで100位以内）を目指すにあたって、教育だけでなく研究の国際化の強化というのが重要になってきます。教育と研究の連携はもちろん、学外の方との連携、北海道大学の同窓生で主に海外で活躍されている方々（アンバサダー・パートナー）との連携を強化し、海外における北海道大学の認知度向上を目指しています。（※アンバサダー：シニア、地域・取りまとめの中心／パートナー：若い方、アンバサダーを支える。現在は合計100名強、将来的に330名を目標）

それぞれのプログラムのために全学横断的な組織（運営委員会）ができており、それ以外でも部局の意見がしっかり吸い上げられるように連携しながら進めています。

そもそもSGUのプロジェクトは、3年前に打ち立てた「北海道大学近未来戦略150ビジョン」と大きく関連しています。この「北海道大学近未来戦略150ビジョン」というのは、北海道大学が札幌農学校として誕生してから150周年にあたる2026年に向けて、どんな大学になるべきか、どんな大学を目指していくかということ（大学改革）を検討したもので、それにあたって「世界の課題解決に貢献する北海道大学へ」というビジョンを掲げました。ブレイクダウンすると、「総長がリーダーシップを発揮する大学運営」「課題解決のためのトップレベル研究を推進」「社会との連携・協働による知の発信・創造」「国際社会の指導的・中核的人材を育成」「世界的存在感を発揮するための戦略的広報」の5つのことを強化し、SGUのプロジェクトとも関連させながら、ビジョンの達成を目指して進めています。

ビジョン達成、大学改革に向けての具体的なプランについて聞かせてください。

■川野辺先生

実行プランの一つとして掲げる「HOKKAIDO ユニバーサルキャンパスイニシアチブ(HUCI)」構想と、

徹底的な大学改革プランである「1-4-4改革プラン」の実施により、「フロンティア精神を体現し、パラダイム転換が進行する世界の中で、時代の課題を引き受け、敢然と新しい道を切り拓く、多様なグローバル人材」を育成するとともに、「世界に開かれ世界と協働する」ユニバーサルキャンパスの実現を目指します。

「HUCI」構想の具体的な内容として、

- キャンパスの国際化：英語で学べる環境を広げる - 授業・シラバスの英語化。学位 & 単位の世界標準化 - 学生の流動化。
- 国際研究拠点の形成：海外から研究者のユニットに来ていただいて、世界のトップレベルの研究者たちとともに研究する。
- 世界を Hokkaido University のキャンパスにする：世界からいろんな学生・教員に来ていただくキャンパスにするとともに、北海道大学の教育を世界のいろんなところで展開する。
- 海外同窓生とのコミュニティの形成：アンバサダー、パートナーの充実。

「1-4-4改革プラン」は、1-ガバナンス強化プラン、4つの教育改革プラン、4つのシステム改革プランから成ります。その中でも特に「4つの教育改革プラン」について概要を説明します。

- NITOBЕ 教育システム：新渡戸カレッジ(学部生：全学部が協働で教育。留学を義務化。新渡戸フェローによるキャリア教育)、新渡戸スクール(大学院生：全大学院が協働で教育。修学ポートフォリオによる教育 PDCA。多国籍チームによる課題解決型学習)
- 国際大学院：英語で学位を取得できる大学院。最終年度までに8つ開設目標。今年度までに3つ開設済み(医理工学院、国際感染症学院、国際食資源学院)。海外のトップレベルの研究グループを招致し、共同研究しながら国際大学院へとつなげていく。
- ラーニング・サテライト：本学の教員を海外に派遣して、そこで海外の教員とコラボしながら、本学の学生と相手学生を教育する(10年後までに60科目開設目標、今年度は40科目強見込み)
- サマー・インスティテュート：6月～9月。海外から教員に来ていただき、本学の教員とコラボしながら、北海道(札幌)をフィールドとしたコースを提供する。日本の大学の中でも最大規模のものをを目指す。最終的に300科目を目標(今年度は100科目見込み)。参加人数目標6000名。

国際化の取り組みとして、その他に力を入れていることや貴学の強み等がありますか。

■川野辺先生

これまでは本学への留学生を増やそうというのが中心にありましたが、現在はそれに加え、本学の学生を外に出すことに力を入れています。新渡戸生には留学を必修化するということも取り入れました。そのための奨学金も拡充しています。

また、研究者の方々を海外から招聘するにあたっての強みとして、国際大学院の存在があります。既に開設済みの3つに関しても、海外の大学、ユニットと連携して研究を進めています。

- 医理工学院：がんの陽子線治療の研究が中心となってくるもので、スタンフォード大と連携。
- 国際感染症学院：獣医の分野。メルボルン大、ダブリン大などと連携。
- 国際食資源学院：カリフォルニア大デイビス校などと連携。

グローバル人材育成とも深く関係するものとして、北海道大学では、アクティブラーニングをどのように取り入れていますか。

■青木先生

アクティブラーニングという言葉自体が一人歩きしている傾向がありますが、私たちはまずそのア

クティブラーニングからスタートしているというのではなく、学生が言葉に頼らないで問題解決能力やコミュニケーション能力を身につけていくことを目的として、そのためにどう授業を組んでいったら良いかという観点で取り組んでいます。多様な背景を持った人たちを、彼らの背景を強みにしながら、どのようにお互いに学び合う環境を作っているのか、そこで重視しなければいけないと思ったのがアクティブラーニング的な要素だったということです。

実際にはどのようなスタイルで取り入れられているのですか。

■青木先生

多文化交流科目というものがあり、日本人学生と留学生がともに同じ科目を受けるつくりになっているのですが、留学生に関しては基本的に日本語の上級者という位置付けで受けてもらっています。一般教育演習という日本人学生にとっては初年時に受ける科目の中で多文化交流科目を開講しているので、一般教育演習の枠組みにのっとって実施するというのが一番大きなフレームワークになっています。今、一般教育演習は23人上限と決まっているため、基本的には少人数、従来の講義形式ではない授業を展開します。留学生は日本語が母語ではないため、言葉だけに頼らない授業を展開するということを前提に授業を設計しています。言葉だけではないので、議論しあうにしても何か準備をしてきてそれを授業に持ち寄ったり、自分の考えをもう一回そこで整理したりします。単純に知識を吸収して今後の学習活動、研究活動に役立てるというよりは、自分たちで何かのプロジェクトを実施したり考えて行動を起こしたりしていくような授業形式のものも実施しています。

アクティブラーニングでは、学生をどのように評価しているのですか。

■青木先生

ルーブリック評価（評価の観点と基準を組み合わせた表を用いた評価手法）を取り入れています。例えば発表の評価であれば、内容2点、構成3点、タイムキーピング何点…といったように項目ごとの評価を組み合わせしていく手法です。さらに、教員がチェックするだけではなく学生にもやってもらい、他者評価＋自己評価という形で相互に評価しあう取り組みもしています。

多文化交流という観点では、他にどのような取り組みがありますか。

■青木先生

国際連携機構というところで、現代日本学プログラム（学部4年間の留学生だけを対象としたプログラム）を運営しています。せっかくSGUの事業で新しいプログラムができ、留学生がキャンパス内にたくさん入ってきているのに、キャンパス内の多様な資源を使わない手はないということで、日本人学生と留学生をもっとマッチングしていこうと考えています。英語の授業にも力を入れる一方で、せっかく日本語を勉強している留学生がたくさんいるので日本語でできる科目をもっと準備する必要があるといった経緯から、多文化交流科目も開発・整備してきました。

今後の展望について聞かせてください。

■青木先生

現在も提供はしていますが、日本語の上級レベルだけでなく、中級レベルの多文化交流科目についてもさらに充実させていきたいと思っています。また、現在、韓国の協定校と遠隔授業で多文化交流科目を実施していますが、将来的にはそれ以外の地域（香港など）にも発展させていければと考えています。

文部科学省が 200 校導入を目指している国際バカロレアについて、入試でどのように扱われるご予定なのか聞かせてください。

■喜多村先生

今年度から国際総合入試をスタートさせるわけですが、趣旨・目的としては、国や地域、学問分野を越えたボーダーレスなグローバル社会を生き抜く、そういう自覚を持った学生を特に受け入れる、ということで、初年度は 15 名（文系 5 名、理系 10 名）でスタートします。（※将来的には 50 名を目標）

入試の特徴、出願の要件としては、国際バカロレア（IB）の資格証書（DP）を持っている者、又は SAT のスコアを提出できる者としています。選考は、いわゆる筆記試験は行わず、面接によって行います。

入学後のカリキュラムについては。

■喜多村先生

初年度はおそらく日本人学生が中心になると思います。授業も日本語で行われます。総合入試ということで、入学時点では、所属学部学科は決まっておらず、2 年生になる時に所属を決めてもらうという形になります。一人ずつメンターのような存在をつけて、グローバルな意欲を持続できるようなシステムも考えています。当然、本人が希望すれば新渡戸カレッジに行くこともできます。特に IB の学生は高校時代に一人一人がいろんな課題を持って、論文を書くという作業をやっていますので、入学後もその分野により深く進めるような道も提供できるようにします。

最後に受験生へメッセージをお願いします。

■山口先生

国際的に活躍したいと思っている学生さんに是非本学に入学して欲しいですね。当然新渡戸カレッジにもつながりますし、本学留学生との交流や、留学のための色々な基本知識なども学ぶことができます。是非そういう意欲を持った学生さん、まさに北海道大学らしくフロンティアスピリットを持って国際的に活躍したい、そういう人たちと一緒に学んでいきたいと思っています。

●インタビューに答えていただいた方々●



■山口淳二先生

北海道大学
副学長（新渡戸カレッジ&スクール副校長）



■川野辺創先生

北海道大学
国際連携機構 副機構長



■青木麻衣子先生

北海道大学
国際連携機構 国際教育研究センター 准教授



■喜多村昇先生

北海道大学
大学院理学研究院 教授